＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有

〒 190-0013
東京都立川市富士見町 2-12-13　安藤ビルB１F
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU !

無料

第７号

毎月発行

創刊 2012 年（平成 24 年）12 月 16 日日曜日

２０１２年（平成２４年）12 月 16 日　日曜日

埋もれた【東北文化】を掘り起こす

東北は「独自文化」で統一できるか？

復興開始原点の確認

あたりまえのことだが、本気で東北の復興を実現するには、想像をはるかに超える莫大なエネルギーが要る。それに加えて、今すでに現れた、あるいはこれから発生する数々の障害を乗り越え、かつ数十年という長期に亘り、このエネルギーを保持し続けることが求められる。しかも政治や行政に頼ることはむずかしい。悲しいかな、すべて、何もかも、自分たちで完結させなければならないことが最近の情勢から判明した。

また、このエネルギーは、個々人の活動がバラバラでは四方八方に拡散して、すぐに跡形もなく消えてしまう。一点に集めて、ターゲットに集中して放出しなければ効果はないも同然だ。では一点に集めるとはどういうことなのか、どうすれば集められるか、これまでの常識という類を一旦棚上げして大胆に考えてみることにしよう。

復興エネルギーを一点に集める方法

少なくとも、復興に関連する人たちの気持ちをひとつにすることは必要最小限の条件である。バラバラでは最初からお話にもならない。そのためには、何が何でも復興させるという強力な意識を共有することが必要だ。

しかし、そんな「あるべき論」を頭では理解しても、身体と心がついていかなければ単なる絵空事にすぎない。いま、復興が実現しなくともいいかと質問されて「No」と答える人間などいない。みなぜひ実現すべきと答える。他方、自分を犠牲にしても復興に努力するかと問われて、「Yes」と答える人間も少ない。そうした議論から具体的なアクションプランを引き出すことは不可能だ。

ではどうするか。復興を目指す人たちがお互いに「同胞」であると感じることがまず先である。「同胞」のために必死になって協力するのはあたり前であり、理屈ではないからだ。えてして、理屈や利害を基礎にした協力関係はいざというときにはもろいものだ。

文化を共有する同胞

では「同胞」であるとはどういうことか。それは、生きていくために譲れない重要部分において、同じものを共有するという強烈なつながりとしよう。

前号では、「東北人」は民族ではないと言った。血のつながりは何ものにもまして強烈だが、同一民族ではないというならば、あとは「生活の根本に根ざした文化」を共有することで「同胞」になるしかない。同じ言葉、同じ慣習、同じ歴史背景、同じ英雄、同じ歌、同じ踊り、同じ食物、そして濃密な人間関係、「同胞」と共有する未来を無条件に信じることなど、即座に捨て去ろうとするとかなりの苦痛を伴う諸要素である。

とはいえ、「東北人」にそれを求めることは現実的な話だろうか。

東北文化の発掘

いま東北を見回して、これが「東北の独自文化」と胸を張って言えるものは少ない。あるいはそうした「東北の独自文化」を強く求める意識も希薄だと見える。あるのは、それぞれの県や地域でバラバラの「地方文化」であり、統一感はない。みな並列である。また、「東北の歴史」という歴史的な背景が共通認識としてあるわけでもない。各県の歴史であり、各藩の歴史、さらに狭い地域の歴史である。

また「東北」は他地域に比べると文化後進地域だとのそしりを受けることもたびたびである。それなのに、苦労して「東北の文化」を発掘しようとしたところで報われるだろうか。

しかし、ここで考えてみよう。こうした見方はほんとうに正しいのか。

郷土芸能の復活

一例を挙げれば、今度の震災で多くの郷土芸能の復活運動が見られた。いまも続いている。こんなにも多くの郷土芸能があったのかと驚くほど、その数は多い。

「かつては伝説にすぎなかった
高さ 48 メートルの神殿の模型」

しかもまだほんの一部にすぎない。全容をまだ掴んでもいない。しかし、たくさんの芸能があることだけは確かなようだ。

悲しいことではあるが、震災を契機にして、こうした文化が発掘されたのだ。もっと深堀していった先には、「東北独自文化」とまではいかなくとも、少なくとも「東北独自文化の鉱脈」に行き当たる可能性があるのではないか。

東北が文化後進地域だと思ってきたのは実は「東北人」そのものかもしれない。もっと「東北」に自信を持ち、震災以降に出てきた郷土芸能を起点にどんどん「東北の文化」を発掘していったら、埋もれていた「東北文化」に行き着くかもしれない。

東北文化埋没の構図

「東北の文化」にはこれまで数々の試練があった。時間的に近い順から概観すると、戦後一貫しての過疎化により多くの地域社会が減少した。それに伴い、地域文化も消え去ってしまったに違いない。今や追跡することさえ不可能だ。

さらに遡ると、第二次世界大戦敗戦直後、占領軍により占領された時期、国内から宗教的な色彩を帯びたすべての文化が一掃された。これによりどれほどの継承文化が消えてしまったことか。東北も例外ではない。

歴史に埋没してしまった文化も、あまり時間を置かずに発掘されれば、あるいは痕跡が残っていればまだ復活も容易である。しかし時間が経過すればするほど復活は困難になる。

さらに時代を遡る。明治時代初期の廃仏毀釈運動も大きな影響を与えただろう。また、それに関連する日本独自の文化排斥の動きもあった。新政府の、欧米文化こそが文化であり、欧米列強に並び、追い越すには、日本の伝統文化など捨て去るべしという無教養の成り上がり勢力がそれを行った。欧米列強に無く、日本だけにある文化は一掃すべしとの考えからであろう。闇雲に貴重な芸術・文化・芸能を捨て去った。失ったものは計り知れない。

それより以前、東北には戊辰戦争での敗戦があった。薩長軍に攻め入られ、多くの芸術品が焼失した。またそれ以上に大きな打撃は、東北なるものが貶められたことである。

さらにある。奥州藤原氏の時代に存在したであろう「文化」は、最近ようやく復元されつつあるが、往時のままではない。少しずつ姿を現しているにすぎない。

それより以前の文化はもっと悲惨で、痕跡すらほとんどない。東北は昔から数多くの侵略と敗戦を経験している。そのたびに立ち上がってきたといわれているが、失ったものは計り知れない。いまとなっては、その大きさを想像することさえむずかしい。もし失ったものを探索しようとすれば、何層もの侵略と敗戦による堆積物を払いのけなければ、その痕跡を見つけることさえできない。

伝説が現実に

もし、ここで、現代の「東北人」も驚くような文化的な発見があったらどうなるのだろう。その可能性がないとは言い切れない。

先月、東京国立博物館で「出雲―聖地の至宝」展を見た。長い間単なる伝説と思われていた巨大社、高さ十六丈、四八ｍの建造物は、「宇豆の柱」の発見によって、伝説ではなく実際にあったことが証明された。その高さはビル十五階建てに相当し、階段の長さ一〇九ｍという巨大な建物である。

柱の発見に至るまで、現代の科学者たちは、そんなことはありえないと思っていた。現代人は古代人を非文明社会に暮らす未開人と思い込んでいるからである。科学技術の進歩という刷り込まれた思い込みがじゃまをしている。

東北の伝説を求めて

出雲だけにこうした伝説があるわけではない。東北にも伝説はある。それならば、その伝説が史実であることを証明するための探索の旅を始めようではないか。

その発見は意外にも、東北の復興にとって大きなエネルギーになることだろう。それどころか、日本の歴史をひっくり返すほどの発見となれば、震災前の姿を取り戻すだけで終わらないであろう。東北の位置づけも変え、「東北人」の意識も大きく変えることだろう。

大胆な東北復興の手法とはそうしたところからも十分に検討されてしかるべきである。東北には、そして「東北人」にはそうした潜在可能性がある。つい先ごろの、戊辰戦争敗戦による痛手で、単に忘れているだけにすぎないと思う。

◇

「出雲の宇豆柱」に匹敵する東北での発見は、一挙に「東北人」を「同胞」として堅く結びつける。復興に要する莫大なエネルギーは、この発見で十分すぎるほどに集まる。そんな探索の旅をこれから始めてみよう。

「平成 12 ～ 13 年に発見された宇豆柱（うづばしら）」

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

「埋もれた東北文化を
掘り起こす旅」その①

「不思議な探訪の旅の始まり」

新しい挑戦

今月号から「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」と題した連載を開始する。

筆者の趣味及び性格からすると、東北文化に関する教科書的な、いわゆる「定説」はほぼ扱うことはないであろう。それをこのコーナーに期待してもらってもムダかもしれない。それは別の場所で見つけて欲しい。

このコーナーで扱うのは、「掘り出し物」である。国内はおろか、東北でもあまり知られていない事柄を取り上げたいと思う。

そのためこのコーナーに登場する人物は概ね、誤解を恐れずに言えば、「定説」に満足できず、独自の道を歩んでおられる方々となるだろう。

しかし、単に「定説」を避けて通るだけにとどまると、ただの変わり者の独り合点の趣味の世界に終わる可能性が高い。やはり、真正面から「定説」を覆すようなインパクトのあるテーマを追求していきたいと思う。出雲の「宇豆柱」（1面記事参照）にも匹敵し、あるいはそれ以上の衝撃的な数々のテーマを、常識にとらわれない発想で追いかけてみたい。

そして何より、東北の過去の掘り起こしから東北の未来の可能性をさぐり、長い間眠り続けているように見える「東北のパワー」を引き出してみようと思う。

大崎タイムス　佐々木和彦氏

不思議な出会い

今回の登場人物は、宮城県の大崎管内のニュースを扱っておられる「大崎タイムス」の記者・佐々木和彦氏である。この人物との出会いはまことに摩訶不思議なものであった。

十月のとある日、何の前触れもなく、筆者の携帯が鳴った。初めての番号。出てみたが、最初は何のお話なのか、皆目見当がつかなかった。しかし、お話をお聞きするうちに、思いあたることがあり、ようやく事態が少しずつ飲み込めてきた。とはいえ、全容はまだ不明のままである。その後、佐々木氏とメールを交換して、やっと全容が明らかになった。そんなミステリアスな出会いから、この刺激的な旅が始まった。

アラハバキの導き

これはきっと「アラハバキ」のお導きだろうと思った。しかしこれには少し解説が必要である。この佐々木氏との出会いの前に、A氏のことをお話しなければならない。

筆者が十年ほど前に生涯初めての書籍を出版した際に、A氏からお葉書を頂戴した。その後何度かやりとりがあったが、しばらく途絶えていた。

それが、当新聞第三号（バックナンバー参照）で、多賀城市にある「荒脛巾（あらはばき）神社」を取材して記事にしたとき、A氏が「アラハバキ神」に強い興味を持っていたことを十年ぶりに思い出したのだ。それでネットでA氏を検索したところ、十数年ほど前に「アラハバキ研究会」を仲間の方々と立上げられていたこともそのときに知った。ここでもまた偶然が重なり、「ある方向」に引き寄せられて行く。

筆者も、この「アラハバキ神」には何かとても惹かれて、もっと知りたいと思っていた。ついてはA氏にご教授願おうとそのとき考えた。それでA氏との初対面の面談を兼ね、取材の申し込みをしてみようと連絡を取った。ところが、A氏から頂戴するはがきはいつも謎の暗号のような文面ばかりであり、訪問のアポイントが取れない。どうしたものかと考えていたときに、何の前触れもなく、佐々木氏からの電話があったという次第。

佐々木氏訪問

十一月下旬、宮城・大崎市にある佐々木氏のご自宅を訪問させていただいた。初対面のご挨拶もそこそこに、話はいきなり「アラハバキ研究会」とA氏のことから始まったが、すぐにも「アラハバキ」の枠組みを飛び越え、話題はあちらこちらへ飛躍する。同時にあらかじめ準備した取材シナリオなどどこかへ行ってしまった。そしてまるで、何かに導かれるように、まさに筆者の現時点での興味に直結する話題が佐々木氏から次から次へと提供されてきた。あたかも誰かが、事前に筆者の興味を佐々木氏に伝えたかのようであった。

ホツマツタヱ

まずは、現在のアラハバキ研究会の会長さんのお話、そして「ホツマツタヱ」（筆者注：真偽が争われている資料、記紀よりも古い日本最古の叙事詩、歴史書であると主張する研究者がいる）の話があった。

会長さんの現在の活動の主体は、「アラハバキ研究」よりも、このホツマツタヱの研究の方だという。

この資料が真実と証明されたならば、日本の歴史は確実に大々的な書き換えが必要となる。筆者もこの訪問の直前に関連図書を入手したばかりだった。

記紀編纂前に文字らしきものを持たないと考えるのは理屈に合わない。何か文字のような伝達手段があったとしても不思議ではない。縄文時代は、西日本より東日本の方が人口が多かった。そこに「ホツマツタヱ」が存在したとしたら、縄文時代のイメージも大きく変わることは間違いない。ワクワクする話題である。

儺草（もうくさ）の話

次は、日本刀美術館を個人で保有・運営されておられる研究会メンバーの方のお話。

ここで岩手県・一ノ関に話題は移る。一ノ関の舞川地区には、今回の取材とは別に最近ご縁が出来ていた。その地区のお話でさらに盛り上がる。あまり広く知られていないが、舞川地区には日本刀のルーツがあり、儺草（もうくさ）神社があり、近くにはきっと「たたら」（筆者注：砂鉄などで日本刀や刃金の素材を製造する方式）の遺跡があるはずだ。「アラハバキ神」と「たたら」は関係が深いと言われている。またここで「アラハバキ」により話がつながった。

ちょうどこれに呼応したように、前記の日本刀美術館には、「日本刀のルーツ」である「儺草刀」が陳列されていると聞いた。これはもう何が何でも行かなくてはならないと思った。

さらに、この話に、東北学研究で有名な高橋富雄先生の講演録が加わる。高橋先生の主張は筆者の興味を強力に惹きつけて離さない。「日本刀」のいわれ、かつての日本という国の構造、日本武尊の東征の話など、もし何らかの有力な証拠が出てきたら、どれも記紀神話を書き換えることが不可避な推論ばかりである。

ここにも、日本と東北の古代史を覆すような話題が潜んでいる可能性が高い。

宮城北西部・岩手内陸南部に東北の宝が眠る

話が進むうちに、筆者の活動拠点がもうひとつ増えるだろうという確信が芽生えた。それは、宮城北西部から岩手内陸南部あたりが一帯となった広範囲な地域である。いまは二県にまたがった地域だが、歴史的にも文化的にも近く、かつ「東北の宝」ともいうべき事柄が眠っているに違いないという確信を抱かせる地域である。

しかし広大な地域であり、いきなりすべてを同時にカバーする探索を開始するには時間も余裕もない。最初は日本刀美術館と一ノ関あたりに絞って探索を開始することにした。

話題の広がり

ついで、一ノ関にある博物館の話、氷口（すがぐち）ご祝唄、それから水沢に移り農民一揆の話、今度は、伊達政宗による遣欧使節四〇〇周年の話、急進的な思想の持ち主のために幽閉された芦東山（筆者注：江戸時代中期の仙台藩の儒学者。国内の刑法思想の根本原理を論じた、「無刑録」の著者）の話。玉蟲左太夫（筆者注：戊辰戦争時、奥羽越列藩同盟成立に奔走した仙台藩藩士、先進的な思想の持ち主）の話。そして、地名研究会のお話に飛び、今度は戊辰戦争に移って、新島八重の話。話のネタは尽きない。

経験の共有と世界の拡大

さらに話題は、郷土芸能の話。南部神楽では、大室南部神楽、城生野（じょうの）南部神楽、石見神楽、一ノ関花泉町にある神楽の舞台の話、行山流しし踊り、鶯沢のしし踊り。これらの郷土芸能に関係する特定個人のお名前が、佐々木氏と筆者で一致してさらにびっくり。ここまでくるともう「奇跡的な合致」である。

それまで筆者の経験の世界だけに存在した事象が、二人それぞれの経験という範ちゅうも飛び越え、空間を飛び越え、新たな東北の可能性という未知のエリアにあらためて位置づけられることとなった。こうして、まことにもって不思議な多くの縁で結ばれた「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」が始まった。

舞草刀研究紀要

みやぎ地名の旅

正宗の夢　常長の現

新島八重　関連書籍

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

郷土芸能と東北復興を考える ②

（公益社団法人）全日本郷土芸能協会職員
かつ行山流舞川鹿子踊り踊り手である

小岩秀太郎氏への取材から

『東北復興と伝統芸能の力』

前号（第六号）では、全日本郷土芸能協会職員かつ行山流舞川鹿子躍り手でもある小岩秀太郎氏のセミナー講演を中心に記事をまとめた。今回は、そのセミナー講演が終了した後、個別に取材させていただいた内容が中心である。

小岩氏は現在、被災地の祭・郷土芸能の復活について、協会を通じても個人的にもさまざまな支援を行っておられる。そこで実際の現場の状況がどうなっているのか、今後どうしたらいいのかなど、より切り込んだお話をうかがった。

東北における祭・郷土芸能への誤解

―震災後すぐ、国中で自粛ムードが支配的になった。にもかかわらず、東北出身の筆者も意外に感じたのは、東北以外の人々が、被災地で復興のための祭・郷土芸能を復活することを理解せず、むしろ自粛すべしとの声があったことである。

（小岩氏）内陸より沿岸部被災地の方が祭・郷土芸能復活の勢いがあった。被災後一年で、ほぼ六～七割が再開に向け活動を始めた。それは東北の持つエネルギーの結果でもあるが、復活させないとバチがあたる、タタリがあるからお祓いしなければという信仰心の篤さもあったと思う。復活した祭・郷土芸能はもともと観光目的の見せるための祭・郷土芸能ではなく、舞台での公演もない。地域の神社仏閣で踊られていた神事仏事的意味合いが強いものだった。そのため東北以外の人々は誰も知らなかったし、意味も分かっていなかった。見たことの無いものが、震災後突然出現した。そこに誤解が生じた。また東北沿岸部や遠野などは特に、祭・郷土芸能が欠くことのできない年中行事となっていて、まち全体、家族ぐるみで行っている。結果、復興と祭・郷土芸能の復活とが非常に密接な関係にあるが、外には知られていなかった。だから、被災後すぐに獅子舞を舞おうという気持ちが理解できなかったのだと思う。

震災後の意味の変化

―被災地での祭・郷土芸能に変化はあるか？

（小岩氏）この震災で祭・郷土芸能関係者が亡くなられたところもある。そうした場所での祭・郷土芸能復活の意味は、従来とは異なるのは当然で、新しい意義づけも生じてくる。鎮魂とか被災者への勇気づけといった意味だ。それだけでなく、震災は祭・郷土芸能を見直すきっかけにもなった。また後継問題も出てくる。たまたま東京から岩手県大槌町にバスで出掛けたおり、車内にかなり派手な恰好をした若者の集団がいた。あとで分かったが、東京に住む町の出身者で、祭の演技者として帰省した。祭装束に着替えると別人になる。沿岸部の強いつながりを感じたし、祭存続のための新しい形を見た思いがした。

祭・郷土芸能存続の経済

―被災地の祭・郷土芸能の経済面で変化はあるか？

（小岩氏）震災前には、毎年の祭の時期、土地の有力者や企業・商店を門付けして回り、祝儀として一日で百万円以上の収入を得て、年間の維持費用としていた。今はみな被災して二ヶ月分程度しか集まらない。復活したはいいが、継続はなかなかむずかしい。なかには都市部での公演で収入を得るところもある。その場合はみな仕事を休んで出掛ける。日当、謝礼金は出ないケースがほとんど。必要経費は交通費・宿泊代・食事代だが、国がすべてカバーしてくれるわけでもない。なかにはかなりの持出しを余儀なくされるケースもある。単純に見せたいという思いが報われない。

東京在住者支援の形

―小岩さんは筆者同様に東北出身で、現在は東京にお住まいだが、東北との関りはどう考えているか？

（小岩氏）地元にいれば、地元のしばりがあって自由な提言もむずかしい。東京からであれば発言しやすい。地元の若手の言いにくいことを代弁してやることも可能だ。とはいえ、地縁血縁は必要で、言葉の問題もある。まったく無関係の人間が地元のことに口出しはむずかしい。とにかく、東北の外からは東北を客観視できる利点を活かし、東北人だから言えることを言い続け、役に立ちたい。

全日本郷土芸能協会活動

―全日本郷土芸能協会の今後の活動についてひとこと

（小岩氏）国に対しては、ぜひ文化行政として積極的に祭・郷土芸能復活を支援して欲しい。協会職員としてそれを訴えていく。協会としては可能な限り支援できる部分は支援していく。いままでもそうした姿勢だったし、今後も継続していきたい。復活した祭・郷土芸能は百年という単位で残し、継続させていくというつもりでやらなければならないと思っている。

―ありがとうございました。

取材はここで終了したが、話はこれで尽きず、さらに非公式の取材兼飲み会に発展した。話題はあちこちに飛び、楽しい時間となったことは言うまでもない。また、氏との交流はこの取材を契機に続き、あちこちの会合や祭・郷土芸能の公演場所で顔を合わせることがたびたびとなっている。

プロフィール

一九七七年　岩手県一関生まれ
一九九六年　岩手県一関第一高等学校卒業
その後、國學院大學卒業、国立台湾師範大学留学
行山流舞川鹿子躍の踊り手
公益社団法人 全日本郷土芸能協会職員

小岩秀太郎氏

牡鹿半島・桃浦のその後

60 年途絶えていた獅子舞の復活

当新聞第四号（バックナンバー参照）で取上げた、牡鹿半島の桃浦地区のその後はどうなっているのか追跡しようと「なんとしてでも！桃浦を担ぐ会」の代表である大島公司氏に十一月末に面会した。震災で三世帯四人にまで大きく減少してしまった桃浦地区で今年夏祭を開催したが、その後どうなっているのか、牡蠣養殖が主要産業なので、牡蠣シーズンを迎えて「収穫祭」が行われたのかどうかも知りたかった。

残念ながら、今年の牡蠣の出来は面会時点では芳しくないようだ。例年収穫は九月あたりからの開始だが、何度か先に延び、結果、「収穫祭」は来年三月に延期する予定となったようだ。

その「収穫祭」で花火を打ち上げたいと、大島氏は現在大崎市の花火屋さんに弟子入りし、花火師の免許を取得予定という。

また奇跡的に見つかった獅子頭を用いて、約六〇年ぶりに獅子舞も復活させようと目論んでいる。しかし、獅子頭と胴幕はあるが、笛も太鼓もなく、踊り手も笛の吹き手もいない、衣装もないという「ないない尽くし」である。かつての獅子舞を知る人は区長さんだけ、牡鹿半島の他の集落の応援も得て、夏には笛も太鼓もない獅子舞だったが、何とか本格的な復活にしていただきたい。

大島公司氏

地元出身者だけでなく、この獅子舞復活に協力したいという方がいれば、ぜひ至急連絡をとっていただきたい。定住、半定住の「新住人」も募集中である。当新聞も応援していく。

【流された獅子頭の出現】

神社の蔵に仕舞われていたものの、津波で流された獅子頭は被災二〇日後、対岸の瓦礫の中から奇跡的に発見された。神社の神主を務める杉山義明氏は、「発見の嬉しさから、思わず避難所で獅子舞を舞ってしまった」という。その獅子頭に宿る力を「桃浦復興のシンボル」として、約六〇年振りに夏祭りで復活させた。また震災を伝えるため獅子頭は最小限の修復にとどめ、たくさんの人と獅子舞を舞えるよう、胴幕（油単）部分は極端に長く製作した。

祭の継続的な運営、資金の問題等も指摘されていた。また、直後は祭りなどやっている場合ではないという気持ちと祭復活を望む人々の気持ちとの間で揺れ動いていたと吐露されていた。

小岩氏からは、今後各地域の郷土芸能の発信力が問われ、発信力の弱いところは生き残るのがむずかしいとのきびしい指摘があった。また、郷土芸能は神社仏閣で演じられていたが、震災によって神社仏閣そのものが移転を余儀なくされるケースもあると報告があった。福島の郷土芸能の復活はこれからという重い指摘もあった。

全体会でもやはり震災発生一年九ヶ月後の今からは、直後の「緊急事態対応」から、中長期的視点、強力なネットワーク形成による復興が提言されていた。

◇

この企業メセナが運営するファンドは「百祭復興プロジェクト」を立ち上げている。今後復活を計画されている郷土芸能保存会にとって非常にありがたい支援プログラムである。

東日本大震災　芸術・文化による復興
支援ファンド「GBFund］フォーラム

【文化による震災復興の、これまでとこれから】参加

十二月十日、企業メセナ協議会による【文化による震災復興の、これまでとこれから】というフォーラムが開催された。筆者は五つの分科会のうち「郷土芸能の復活と地域コミュニティーの〈今〉」に参加。

ゲストは、岩手県大槌町の向川原虎舞風虎会の岩間美和氏、全日本郷土芸能協会の小岩秀太郎氏の両名。

岩間氏からは、震災から一年九ヶ月経過し、直後の状況と比べ大きく変化し、大槌町に訪れる人も大きく減少し、地域復興や祭りのあり方を転換する必要性があるとの発言があった。また、祭の後継者育成のむずかしさについて、さらには

フォーラム 2 部

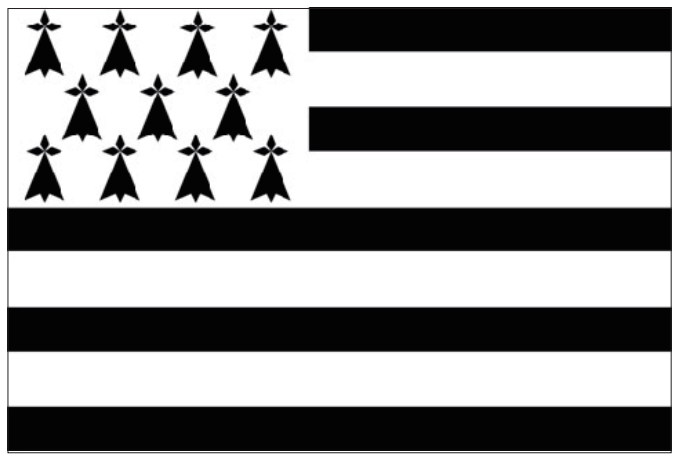
交流会の模様

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

ブルターニュの旗 そして東北の旗へ

「ケルトと東北」完結編

「ケルトの地」というと一つのカラーと思いだが、決して同じ色ではない。アイルランド、スコットランド、ブルターニュと、地下に流れる水脈には大きな共通項はあれど、人々が暮らす家並み、言葉、歴史と当然ながらそれぞれに違った色を持っている。



ブルターニュの旗

プロフィール

古山拓（ふるやまたく）
岩手県出身・宮城県仙台市在住。水彩画家・イラストレーター。個展と広告イラストレーションの二本柱で活動。東北とケルトの地を描く事で独自のアイデンティティを模索中。
www.termnet.co.jp/furuyama/
trumpet-tugboat.seesaa.net
facebook.com/takufuruyama

古川拓氏

東北も同じだ。東北というひとつのくくりで考えるのは簡単だけれども、県という境界線以上に目に見えないボーダーラインが存在し、それぞれの地方に独特の色を持つ。ひとつの地方の中にある無数の価値観、風土。それらをひとつにまとめるアイテムがある、と実感したのが、フランスブルターニュ地方を旅したときの体験だ。

◇

今から十年程前のことになるけれど、ケルトの地詣でを意識したときに、目の前に横たわったのがフランスの西部、ブルターニュ半島だ。何がきっかけでケルトの地とわかったのかは今となっては思い出せない。きっかけはさておき強烈に引っ張られ、意識の赴く先に次々とブルターニュ情報が横たわる、そんな導きにも似たものを感じ、私は旅に出た。

旅のルートを私はイタリア発ブルターニュ行きとした。ある意味ケルトの対局にあるローマ帝国の本山イタリアが、出発地点としてふさわしいと思ったからだ。イタリアをひとしきり見て回った後、ベネツィア発パリ行きの夜行列車でフランスに入り、TGVで州都レンヌへと辿り着いた。

初めて訪れたレンヌ。何が、どう、という訳ではないけれど、「気の置けない町」という、「居やすさ」を滞在中感じていた。そのことを同行の妻に話すと同じ感想を口にした。「どうしてだろうね?」「なんで居やすいんだろう?」そんな話をしていたが、ふと町が持つ「気」が、自分たちが暮らす町と似ている事に気がついた。

「そうか、仙台の「気」だよ、ここは…」

偶然にも仙台とレンヌは姉妹都市の関係を結んでいる。帰国後、仙台とレンヌの姉妹都市締結の由来を調べると、レンヌ関係者が仙台を訪れた時に、故郷と似た空気を感じたという著述を見つけ、私と妻の皮膚感覚が決して偶然ではなかったことを確信した。

前回の連載でも書いたけれど、土地が持つ歴史や人々の気質が複雑に絡み合い醸し出す、確かな「気」がある。ユーラシアの東西の端にある共通するものを感じた。

◇

ブルターニュには、歴史の流れの中、意志に反してフランスに組み込まれていった歴史がある。それ故だからだろうか、いまだに独自のアイデンティティを大切にする空気がある。レンヌに博物館を訪れたときも、言葉はわからなかったけれど展示からその気質を感じたことを覚えている。人々のアイデンティティを模索する機運は、ブルトン語なるゲール語（ケルト系の言葉だ）復興運動をも巻き起こしたくらいだ。

そして驚いたのは、ブルターニュが独自の旗を持っている事。そう、国旗ならぬブルターニュ旗があるのだ。

◇

なんとうらやましいことだろう、と、素直に私はそう思った。独自のアイデンティティを持つ人たちが「旗印のもとに…」とか「旗を掲げる」という言葉を決して抽象表現ではなく、厳然と目の前に掲げることの大切さ。この時の旅での大きな収穫のひとつは、翻るブルターニュ旗を見たことにあったといってもいい。（同じような地方の旗は、スコットランド、ウェールズにも見ることができるがすこしだけ意味合いが異なるように感じている。）

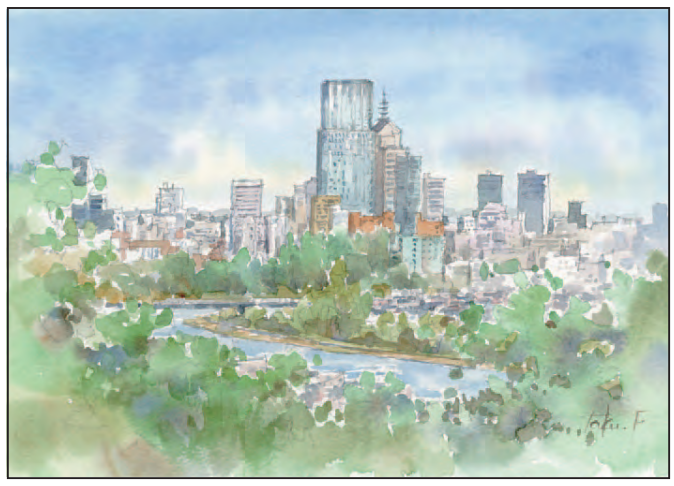
◇

東北復興が叫ばれている。自分が生計をたてるフィールドそれぞれで主張は違うだろうし、復興イメージもまた千差万別だと思う。そんな今、つい思い出してしまうのが、ユーラシアの西の果てに翻るブルターニュ旗だ。旗は、アイデンティティが共通ならば異なる思想、立場であっても、それらを大きく包み込むシンボルだ。

だれもが認める東北人の気質を結晶させた旗が、三陸の被災地に翻っている光景…。被災地東北に立ち、ブルターニュに思いを馳せるとついついそんなシーンを想像してしまうのだ。

◇

「旗を揚げた日」というタイトルの拙作がある。この絵を仕上げた時、思っていたのは、いままで綴ったことだった。どんなにつらくとも旗を揚げ続けたい。そうすることで未来は開かれる、そう思いたい。



【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

「震災遺構」をどうするか

議論が分かれる「震災遺構」の取り扱い

東日本大震災発生からまもなく一年九カ月になる。大津波によって甚大な被害を受けた沿岸地域でも瓦礫の撤去は進んでいる。それに伴って議論の的となっているのが、「震災遺構」の取り扱いである。

震災後マス・メディアによって繰り返し報じられた、陸に打ち上げられた大型船、建物の二階部分に乗った大型バスや観光船、転倒した鉄筋コンクリートの建物、鉄筋の骨組みだけになった建物、これらは津波のとてつもない威力をまざまざと見せつけた「生き証人」である。こうした「震災遺構」は瓦礫の撤去と被災地域の復興が進むにつれ、徐々にその数を減らしてきている。つまり、こうした地震や津波の恐ろしさを物語る遺構も瓦礫と一緒に撤去されつつあるのである。

このことについて、意見は真っ二つに分かれている。一方は「あると地震の恐怖や亡くなった家族のことを思い出すので早く撤去してほしい」というもの、もう一方は「地震や津波の恐ろしさを後世に伝えるものとして保存してほしい」というものである。

他地域における先例

実は、こうした「震災遺構」の保存については、同様の議論が過去に地震に見舞われた地域でも起こっている。そして、それに対してどのような結論を出したかについては、地域によって異なっているのである。

九三年に北海道南西沖地震による津波と火災で一九八名の犠牲者を出した奥尻島では、「震災遺構」は残されなかった。海水に浸かった建物の保存や維持管理の困難さ、遺族感情への配慮がその理由だったようである。壊滅した集落の跡地には公園ができ、慰霊碑も立っているが、震災そのものの痕跡は残っていないそうである。島は復興したが、一方で震災の記憶の風化も指摘されている。

九五年の阪神大震災では、神戸市は大火災に見舞われた。その火災に耐えて残った公設市場の壁は、「震災の語り部」として海を隔てた淡路島の北淡震災記念公園に移設されて保存された。「神戸の壁」と呼ばれるこの震災遺構も、神戸市自体は保存に消極的で、地域でも必ずしも保存に賛成の声ばかりではなかったという。そのような時に、対岸の淡路島の旧津名町長の故柏木和三郎氏が受け入れを表明してくれたため、震災後つくられた北淡震災記念公園で保存されることになったのだそうである。神戸市でも現在、「海を渡った」この「神戸の壁」を除けば震災の爪痕を感じさせるものはほとんどないようである。

一方、〇四年の新潟県中越地震を経験した長岡・小千谷両市は昨年、地震の「メモリアル拠点」として残された四つの施設と三つの公園を結んだ「中越メモリアル回廊」を立ち上げた。これは被災地をそのまま「情報の保管庫」にする試みとのことで、それぞれの拠点を巡って、震災の記憶と復興の軌跡に触れてもらうことを目的に整備されたのだそうである。土砂崩れでできた「天然ダム」によって水没した家屋がそのまま残されたメモリアルパークもある。車が土砂崩れに巻き込まれた現場はそのまま慰霊のためのメモリアルパークとなった。

このように、地震一つ取ってみても、撤去、移設、保存と、地域によって取られた対応は異なっていることが分かる。日本では地震だけでなく、火山の噴火による災害もある。九一年には雲仙・普賢岳噴火で四三名もの犠牲者が出た。その後、現地では火砕流で焼けた小学校や自動車、土石流で埋没した住宅群が保存された。三宅島の噴火でも溶岩流に埋没した学校や土石流に埋没した神社が残されている。

「原爆ドーム」に学ぶ

こうした事例を参考にしながら、今回の大震災においても「震災遺構」の取り扱いについて考えていかなければならない。もちろん、瓦礫と一緒に撤去してしまうのが最も簡単である。それ以降の保存や維持のための費用も掛からないし、被災者も見る度に震災のことを思い出さなくても済む。しかし、本当にそれでよいのだろうか、と思うのである。失ったものは二度と戻せない。見るのは辛い、その気持ちは分かる。しかし、辛い、という今の気持ちだけで即撤去してしまう前に、将来のためにもう少し考える時間が必要なのではないかと思うのである。

もう一つ、参考にしたい事例は、広島市にある「原爆ドーム」である。原爆ドームは、元々広島県物産陳列館として竣工され、その後広島県産業奨励館と改称された。四五年八月六日に広島市に落とされた原子爆弾により、爆心地から約一六〇mの距離にあったこの産業奨励館も爆風と熱線で大破し全焼、当時建物の中にいたおよそ三〇人の人は皆即死だったそうである。

戦後、そのてっぺんの形から誰からともなく「原爆ドーム」と呼ばれることになったこの旧産業奨励館についてはやはり、記念物として残すべきという声と、被爆の悲惨な記憶につながるので取り壊すべきという声に二分されたという。保存に向けて大きく動き出したきっかけは、一歳の時に被爆し、六〇年にわずか十六歳で白血病のため亡くなった楮山ヒロ子さんが残した日記に書かれていた「あのいたいたしい産業奨励館だけが　いつまでもおそろしい原爆を世にうったえてくれるのだろうか」という言葉だったそうである。

これを契機に保存を求める声が次第に高まり、六六年広島市議会は「原爆ドーム保存を要望する決議」を採択する。そこには、「ドームを完全に保存し、後世に残すことは、原爆でなくなられた二〇数万の霊にたいしても、また世界の平和をねがう人々にたいしても、われわれが果たさねばならぬ義務の一つである」とある。この翌年、第一回の保存工事が行われた。被爆から実に二二年後のことである。その後、九六年に世界遺産への登録が決定したのは周知の通りである。

「間接資料」と「実物資料」

「百聞は一見に如かず」と言う。原爆ドームは核兵器の恐ろしさを如実に物語る象徴的存在となった。我々は、あの建物を見る度に、自分が体験していなくても、広島を襲った悲劇に思いを馳せることができる。

今回の地震では、多くの人が携帯のカメラなどで津波の写真や動画を撮影した。たくさんの証言もある。「震災遺構」がなくても、それらが地震や津波の恐ろしさを伝えてくれるのではないか、そのような意見もあるだろう。もちろん、それはそれで震災の貴重な記録である。しかし、それはあくまで記録である。

記録は、博物館学の観点から見れば「間接資料（二次資料）」である。それに対して、「震災遺構」のようなものは「実物資料（一次資料）」と呼ばれる。記録に加えて、地震や津波の恐ろしさを他の何よりも雄弁に語ってくれる「震災の語り部」たる「震災遺構」があれば、それらがまさに、原爆ドームが終戦から六七年経った今も戦争の悲惨さと平和の尊さを語り継いでいるのと同様に、これから先も自然災害の恐ろしさと防災意識の大切さを教え続けてくれるに違いないと思うのである。

被災全市町村が最低一つ震災遺構保存を

先の原爆ドーム保存を求める決議になぞらえれば、震災の遺構を保存し、後世に残すことは、地震で亡くなられた二万近い霊に対しても、また災害からの復興を願う人々に対しても、我々が果たさねばならぬ義務の一つである、と言える。この国では、どこにいても地震を始めとする自然災害のリスクからは免れ得ない。私たちが遭遇したこの上なく恐ろしく悲しい体験を、自分や自分の大切な人の身を守るための方策と共に他の地域の人たちに伝えることは、私たちにしかできないことである。そしてそれは、震災後、全国各地から寄せられ、今も続いている支援の手に対する、私たちができる恩返しの一つでもある。

他地域の人たちだけのことではない。この地域の将来の世代の人たちのこともある。私たちは大震災のことは決して忘れない。私たちの子どもの世代も大丈夫だろう。しかし、その子どもやその先の世代となればどうだろうか。それら先の世代でも、見れば地震や津波の恐ろしさが伝わる、そうしたものを残すことは、やはり私たちの責務ではないだろうか。

もちろん、残すと判断するのは、今すぐでなくてもいい。ただ、将来の可能性のために、震災遺構となりうる対象の早期撤去については、しばし留保してほしいと思うのである。広島の原爆ドームが保存されるまでには二二年の歳月が必要だったが、その間原爆ドームが撤去か保存かという判断を留保されたために、保存の機運が高まった後の保存が可能となったのである。もし戦後すぐ撤去され、被爆を物語るものが何も残っていなかったとすれば、当然保存を求める動きもなく、世界遺産登録もなく、日本に住む誰もが被爆の悲劇の手掛かりとしていつでも思い起こすことができるあの建物の映像もなかったわけである。

今回の大震災で東北は、北は青森の三沢市から南は福島のいわき市まで、太平洋岸のほとんどの市町村が被害を受けた。私は願わくは、これらの被災した市町村がそれぞれ、最低一つずつでも、大震災の痕跡を伝える遺構を残してくれればよい、と強く思っているのである。

津波によって3階建ての建物の上に乗り上げた乗用車　震災直後随所で見られた光景である

執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/

大友浩平氏

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

『九州と、向き合う』

東北が、動かない。

自主独立はおろか道州制、本誌先月号で大友浩平氏の述べられた総合特区。本誌創刊以来、全国的に見ても何かと鈍重に思える、東北の消極的体質への嘆きは収まらない。

以前、私はスコットランドに今後の東北の指針のヒントを求めたが、今回は日本国内の他地域を見る事で、東北の性格の本質と、状況打開の糸口を探ってみたい。その地域を、九州と定めてみる。

＊

東北において九州を語る、となるとピンとこないかも知れない。同じ日本列島上にありながら、最も馴染みのない地域だ。更に南西に遠い沖縄の方が、何かと情報が多い事もありとつき易く感じる程だが、それはもしかすると九州の方でも、東北より更に遠い北海道の方が旅行先・移住先として想定しやすい点で同様かも知れない。おそらく両者にとってお互いが、中途半端に遠く、そしてわかりにくいのだ。しかし、並び立たせて考えるのに国内で九州ほど不足のない相手はいない。かつて九州を旅しその魅力の一端を垣間見た私には、そんな予感がある。

＊

九州と東北を並べ、まずよく言われるのは、その歴史的共通性である。何と言っても、草創間もない「大和政権」の侵略に抵抗した勢力として、東北には「蝦夷」が、九州には「隼人」「熊襲」の存在があった。東北に比べ、抵抗を続ける為の地盤に乏しかった故か、彼ら九州の先住民たちの降伏は早かったが、現在でも特に鹿児島県人の気質を表す際に「隼人」が使われる程、人々には親しまれた「種族概念」であり、その辺りは現代東北人にとっての「蝦夷」の比ではないようにも思える。

東北人の多くは初対面ではとつつき難く、そのため外部の人への第一印象は良くないが、時がたつと裏表なく打ち解ける、という。一方、九州人の多くは始めから人なつこく、男女ともはっきりした性格で魅力が伝わりやすいが、反面非常にしたたかなところがある、という。雄大な大地という点では負けていない東北の人々とは、よく似ているようでいて実は大きく異なる性格が、そこにあるようだ。

＊

九州と東北の人間性の違いを表すのに、今回私は「銀河鉄道」を引き合いに出してみたい。銀河鉄道とは、岩手県出身の作家・宮沢賢治が大正期に創造した『銀河鉄道の夜』の架空の乗り物。そのアイディアに、福岡県出身の松本零士が独自の解釈を与えて『銀河鉄道999』を描き出し、昭和の漫画・アニメ黎明期に一時代を築いた。どちらも大好きな作品なのだが、この「銀河鉄道」、呼称は同じながらその実体は全く異なるものである。宮澤賢治の銀河鉄道とは、死後の人間や異次元の住人が乗り込み、天空の無限の世界を行く「この世のものならぬ」異界の乗り物であり、宮澤は当時最新の科学や天文学の知識を駆使しながらも、宇宙とは科学では説明のつかぬ、人智の及ばぬ世界であると捉えていた様が伺える。一方、科学万能の未来に夢を描くSF時代の申し子・松本零士の銀河鉄道は、未来の宇宙開発が宇宙に張り巡らせた、ハイテクの鉄道システムである。途方もない話だが、無限にも思える宇宙空間に人類は隈なくレールを敷いて、基本的に大宇宙を把握し、管理しているのだ。

両者に共通するのは、未知の世界を旅しながら、少年が出会いと別れを通じ成長するという壮大なロマンチシズムであるが、その物語背景は根底から違っており、それが九州と東北の発想法、世界観の違いにつながるのではないか、と私には思えるのだ。

『999』の場合、作品設定に即せば、人間が到達し開拓できない場所はなく、いかに夢のような話でも、「夢とは実現させるために ある」のだ、という事になる。即ち九州的思考とは、あくまで現実世界が前提になっていて、他の松本作品『宇宙戦艦ヤマト』『ワダチ』等も大和魂や反米・反体制という概念から始まっているように、必ず国家・民族の枠組があり、具体的である。この現実世界と乖離しない且つ大胆な発想法こそが、幕末の九州人に国をひっくり返させ、現代の九州の娘たちに芸能界に乗り込ませ成功させる原動力になっている、と言ったら穿ち過ぎか。

対して『・・の夜』の宇宙は、論理的に説明するようなものではなく、人間の力でどうこうできる世界ではない。少年の住む地上世界にしても日本ですらなく、国や民族の枠組自体がない。宮澤の物語舞台として知られるイーハトーヴにしても、地元岩手がモデルとはいえ県の概念は超越したものである。これは何でもありの童話なのだから当然だと言われるかも知れない。しかし、本当にそうなのか？

＊

明治維新という、日本国内での勢力逆転劇がかつてあった。三百年近くに渡る徳川の時代に忍従を強いられた西日本の人々は江戸を占領し、徳川の臣下的存在と見なした東北を武力で制圧した。江戸は彼ら主導で帝都東京として生まれ変わるが、注目すべきは、九州には古代、天皇が降り立ったとする「国の始まりの地」という自負が秘められていたであろうという事だ。つまり元来九州は辺境ではなくむしろ日本の「先端」であり、所詮東京は九州が作った出先機関、手足の部分に過ぎない。故に、いかに距離的に離れていようと九州と中央は一体であり、例え九州の人材が東京へ渡っても、人が活躍の場に出て行くのは当然と考える「自然な」中央志向が定着していったものと思われる。これに対して距離的にはずっと東京に近い東北だが、逆に古代からの支配・被支配という一貫した関係から、両者の間には深い溝がある。殊に明治維新後に一方的な差別と搾取に晒された東北にとって、才能・人材が中央へ流れていく事には、大切なものを奪われていく喪失感が付きまとってきた。こうした事からも、九州人の発想が迷わず現実の世界に立ち向かう方向に働くのに対して東北人のそれが逆に現実の概念を避ける方向に動く、つまり辛くてどうにもならない状況からの現実逃避のようになるのは道理のように思える。では、『銀河鉄道の夜』は現実逃避の絵空事に過ぎず、東北的発想は九州的発想に対して負け犬的な、劣ったものなのだろうか？

どうも、そんな単純な事ではないように思えてならない。

＊

二つの「銀河鉄道」をよく読むと、『999』の物語が実は、今もこの地上で無数に起きている旅人たちのドラマに他ならず、その舞台が未来の宇宙に置き換わっているだけに過ぎない事がわかる。広い宇宙の話なのに皆日本語を話しているし、惑星中の人間が食べ過ぎて巨大化したり、雨がネジでできていたり、と話も決して科学的ではなく、寓話的なものが多い。松本が描きたかったのは宇宙そのものではなく、その主眼は自らも体験したであろう少年の日の旅立ち、その無限の未来へのイメージの再現にあったのではないか。

一方の『・・の夜』には、よりストイックに、宇宙そのものに迫ろうとするある種生真面目で、むしろ現実的な姿勢が感じられる。現実の人類にとっては宇宙は依然謎ばかりで、一般人にはまず踏み込めない領域であり続けている。宮澤は宇宙を、例えば人間が肉体を失う程の変貌を経ねば到達し得ない場所として描く事で、その謎の深さを表現した、と言えないだろうか。

ここで思い出すのは、古代東北に平泉を建設した藤原清衡である。平泉はそれまで古戦場跡に過ぎなかった原野に出現した都市であるが、清衡は自分達「蝦夷」と大和勢力の境界であるこの地に、戦争の起き得ぬ世界即ち「浄土」の現実化を図った。中尊寺金色堂はその象徴であり、ここにも論理を超えて人智の及ばぬ世界を描き出す、国という枠組に捉われない発想法がある事がわかる。つまり、東北的発想法とは現実逃避ではなく、むしろ現実と思われている概念を打破し新しい何かを作り出す実行力をも伴ったものなのである。そう考えれば、優れた娯楽作は生み出せても、結局国や民族の概念から抜けられず、現実世界の「焼き直し」に終始してしまう九州的発想法の方にある種限界があると言えるかも知れないのだ。

＊

しかしここで私は、九州と東北の優劣を論じたいのではない。幕末の九州と、平泉時代の東北を比べれば、九州が日本という国ごと動かさないと気が済まないのに対して、東北はむしろ日本の管理の外で自由にやりたいという、全く相反する性格が見えてくる。いじめ問題の悲劇は、いじめられる側がいじめる側の価値観を受け入れ染まってしまう事にあるというが、いま東北は、九州的価値観が作り出した日本という枠組にがんじがらめになっている。おそらく、その中にいる限り東北は何をするにも鈍重な、本来の力を発揮できない状態が続くだろう。九州的なもの、東北的なもの。互いに違うもの同士として認め合い、学び合いながらも、各々が独自の道を行くべき時なのではないか。

可能な限り自分達の事を自分達で思い通りに決め、責任を持って為せる事。その仕組を見出せた時、東北は変わるに違いない。

奥羽越現像（おうえつげんぞう）氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル（ヴァイオリン）担当。

東北人の銀河鉄道とは・・（仙台市）

強烈な九州魂『ワダチ』

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

東京駅復元に使用された
雄勝スレート素材と同じ

雄勝硯の復活へのエール！

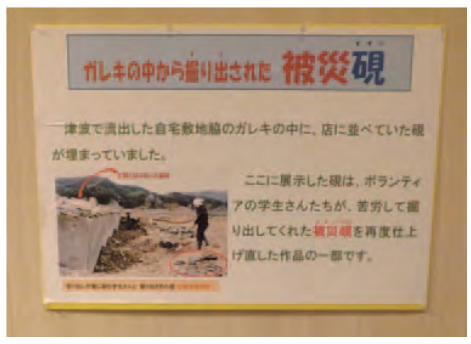
【津波を免れた硯展】

日本三景・松島の五大堂近くにある「十二支（えと）記念館」展示ギャラリーにおいて、石巻市伝統文化継承者育成プロジェクト主催で、【津波を免れた硯展】（入場料無料、九時～午後四時まで、無休）が十一月十七日から始まった。

3・11の大津波で何もかも流されてしまった宮城県石巻市雄勝地区。ここで奇跡的に残った芸術品ともいえる雄勝硯の多くの作品が展示されている。

今回開催の目的は、この展示を通して伝統工芸品としての雄勝硯を知ってもらい、併せてなかなか見つからない後継者をも見つけ、育てていこうということだが、とにかく、とても硯として使うのに忍びないほどの芸術的な硯ばかりであり、見るだけの価値がある。

製作の様子



被災１年後に学生ボランティアにより発見された

家族集合

硯作家の遠藤弘行氏

『雄勝硯』とは

『雄勝硯』は、被災前には国内最大の生産量を誇っていた。原石は「玄昌石（げんしょうせき）」といい、全国の天然硯の九割の生産高を占めていたという。

雄勝地区での硯生産の歴史は古く、遠く室町時代に遡り、約六百年の歴史を持つ。伊達藩の藩祖―伊達政宗も愛用していたし、この正宗から幕府に献上されて以来、全国的に有名となった。

震災前までは文房具としての硯生産がほとんどであったが、芸術品としての硯の制作も行われていた。

全滅の雄勝地区沿岸

しかし3・11ですべてが流され、跡形もなくなった。

今般の硯展示の主役である硯作家一遠藤弘行氏も、一軒残らず津波に飲み込まれ、すべてが流され、破壊されていく様子を、少し高台にあった仕事場から呆然と見ていたという。いまは山中にある仮設に住居を移し、十メートルの高台にある実家に仮設プレハブを建てて硯作家としての創作活動を再開した。しかし、かさ上げ工事の予定が決まらず、数年先はどうなるのか不安な毎日を過ごしているという。

遠藤さんは現在、個人作家として活動しており、組合には加盟していないため単独で行動できるが、組合組織事業になっていた量産ものの硯事業は今でも往時の活況が戻らないどころか、再開の目途も立たない状況という。

東京駅復元の雄勝スレートと同じ素材

話は変わるが、いま話題の復元東京駅に使われている雄勝スレートが有名になり、多くのメディアで取り上げられた。素材としては雄勝スレートも雄勝硯も同じであることはあまり知られていない。製品化された後の知名度の違いによる双方のあまりにも大きなこのギャップは何とかして埋めてあげたいと思うのは筆者だけではないはずだ。

初めての親子展

前記のように、ここで展示されているものは被災をくぐり抜けたものばかりだが、実は、遠藤弘行氏の作品と先代である父の故盛行氏の作品が同時に展示されている。いわば「親子展」である。

石質の美しさにこだわり、量産ものではない一品ものの創作硯に独学で転進していった父の盛行氏は十三年前に亡くなられたが、震災を契機に、奇しくも初めての「親子展」となった。

故盛行氏の作品にはドラマがあった。震災時には、雄勝地区の岬の突端にある白銀崎の雀島という場所にあった観光ホテルに展示されていた。この場所がたまたま五〇・六〇メートルの高台にあったことと、そのホテルに展示されたままになっていたおかげで助かった。

父・盛行氏は以前、この震災を生き残った作品を含め、手がけた創作硯はすべて非売品とし、作品集を自費出版するほどの熱の入れようだった。亡くなる前には、入院していた病院で個展を開いたが、そのときは、病気であることを忘れさせるほど元気になり周囲を驚かせたという。

弘行氏作品のドラマ

弘行氏の作品にも、父盛行氏の作品に劣らないドラマがあった。震災から一年以上経ってから、学生ボランティアの手で掘り起こされたのだ。ほぼあきらめかけていたのに、元の作業場の土砂をかなり掘り起こしたところ、思いもかけず発見された。それも特に思い入れの強い芸術品レベルの作品がすべて無傷で掘り起こされたのだ。まことに不思議というほかはない。

さまざまな作品

作品にはさまざまなものがある。表と裏の両面が使える硯。書道家とのコラボによる作品。特注品もある。素材である石材の面白さをそのまま活かした作品。剣道大会に寄贈した作品。赤ちゃん誕生記念用に作った足形の作品。当然ながらどれも一品ものである。

父盛行氏の作品は非売品のため価格はついていないし、弘行氏の作品にも価格がついていない。もし販売するとしたら、十数万円から数十万円の間かもしれないということのようであるが、直売のみということなので、交渉次第ということであろう。

◇

後継者がいないというのが最大の悩みという。硯産業が衰退産業のひとつということが理由だそうだが、まことに残念なことである。

取材当日はたまたまご家族、ご兄弟が勢ぞろいした。現在の作業所は、固定も携帯も電話が通じないし、ネットも通じない環境にあり、作品の宣伝が出来ない状況にある。多くの方に会場に見に行っていただき、作品の良さをＰＲしていただきたいと思う次第である。

◇

展示期間は年明けの一月三一日まで二ヶ月以上あるので、お近くの方、観光で松島に行かれる方はぜひお立ち寄りいただきたい。

サン・ファン・バウティスタ号硯

剣道大会寄贈硯

虎が飛び出しそうな硯

両面使用できる硯

繊細なデザインの硯

硯展会場を提供した
「十二支（えと）記念館」

狩野章氏に聞く 観光地・松島の復興

上記の「雄勝硯展」の会場となった『十二支（えと）館』の支配人・狩野氏に、観光地・松島の復興状況についてお聞きした。

◇

『十二支館』は隣接する『観光物産館』と『浪漫亭』とともに、北日本海事という会社が運営する。『十二支館』、『観光物産館』の建設は平成二二年十月で、完成からわずか半年で被災したという。一階部分は全滅、商品はすべて仕入れ直し、回復には一年数ヶ月も要した。道路の復旧で、最近ようやく徐々にではあるが観光客も増えてきた。しかし、仙台一石巻間を走る仙石線は松島海岸駅の先で遮断されたまま、まだ全開通していない。そのためか、仙台から松島海岸駅までの電車本数は少ない。それでも取材当日は駐車場に観光バスを何台も見かけた。

観光地・松島の観光以外の名物が「牡蠣」である。しかし今年の猛暑で、松島産の牡蠣は七割が死滅した。松島湾はもともと海が浅く、猛暑で熱せられた海水が原因らしい。幸い宮城は牡蠣養殖の盛んなところであり、近くの牡鹿半島からの調達で今年を乗り切るという。

３・11からの復興に励む観光地・松島も、こうした次から次に来る不幸に見舞われているが、負けていられないという強い気持ちで、復興に取り組んでいる。

こうした被災企業でありながら、今回の「雄勝硯展」をはじめとして、『十二支館』は、復興途上の伝統工芸品などの展示にも積極的に取り組んでいる。

被災したものが被災したものを支援する活動、これが本物の【絆】である。

支配人　狩野章氏

十二支（えと）記念館

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

笑い仏
福島への行脚　第四回
當麻寺中之坊院主 松村實昭師ご寄稿

誕生地である鳥取から行脚を続けながら、縁のあるお寺に逗留させてもらい、福島の地を一歩一歩目指す「笑い仏」さんこと「がれき光背仏」。その旅程を見守る我々MONKフォーラムが、仏さんを仲立ちに旅の途中で頂戴した出会いの諸々について書き綴るのが、このコラムの趣旨です。今回は初めて、逗留させて頂いたお寺のご院主に原稿をお願いしてみました。（モラ坊円瓢）

・・・・・・・・・・・・・・・

「笑い仏さんをお迎えしてもらえないか？」と友人の僧侶から相談を受け、MONKフォーラムなる団体と笑い仏さまの話をお伺いしました。聞けば、鳥取から被災地の福島まで行脚されるほとけさまとのこと。妙にご縁を感じた私は詳細も分からぬまま、二つ返事でこの話をお請けしました。

まず良いタイミングだったことは、ご安置させて頂く場所がすぐに頭に浮かんだことです。平成二四年は重要文化財である中之坊書院を特別公開する四年に一度の年回りで、このお話を頂戴したのはちょうど十月からはじまる書院特別公開の準備をしている時でした。

◇

當麻寺（たいまでら）は今から一三〇〇年以上前の飛鳥時代に創建されたお寺ですが、奈良県の葛城市という奈良盆地の南西部にあり、奈良の中心地からはずいぶん離れた場所にあります。古代大和の中心からちょうど真西、つまり夕陽の沈んでいく方向にあることから、古くから西方極楽浄土を想う場所として信仰されてきました。當麻寺の本堂には、極楽浄土を壮麗に描き出した「當麻曼荼羅（たいま・まんだら）」という掛軸がご本尊として祀られています。

◇

「中之坊」は、當麻寺の中で奈良時代から続く最古の僧院で、大和の三名園に数えられる庭園「香藕園（こうぐうえん）」が広く知られています。その香藕園に面して、約四〇〇年前の建立になる中之坊書院が建っています。

◇

中之坊書院は、第百十一代後西天皇が行幸されたときに陛下をお迎えした場所で、曽我二直庵という画家の花鳥画や、大きな円窓のあるお茶室などが今に残っています。この中之坊書院を特別公開するのが子・辰・申の四年に一度の秋。この書院の一室、「侍者の間」がちょうど空いておりましたし、この特別公開の機会であれば、多くの方にご参拝いただけるのではないか、と考え、〝笑い仏〟さまをお迎えすることにさせていただいたのでした。

中之坊書院

◇

そうして十月二日、笑い仏さまが当坊（當麻寺中之坊）においでになったわけですが、この日にも不思議なご縁がありました。

◇

ちょうどこの日は、私が僧侶仲間とともに開催している「仏像を彫る会」の講習日で、講師の仏師さまとともに私を含め参加者が懸命に彫刻刀を走らせていました。そこへ笑い仏さまがご到着されたので、講師の渡邊勢山仏師にお話ししたところ、なんと、笑い仏さまの生みの親である山本竜門先生と渡邊仏師がご同門として旧知であることがわかったのです。渡邊仏師も山本先生の生み出されたほとけさまをご覧になるのは久しぶりだったようで、「あ、この辺の彫りは山本さんらしいな」「こういうところはさすがだな」と感心したり、懐かしんだりされていました。

◇

そして何よりも奇縁だったのは、この当坊の「仏像を彫る会」でもまた、被災地のために仏像を彫ろうとしているところだったことです。岩手県陸前高田市の津波に呑まれた高田松原の松を、地元の森林組合さまから「被災松を有効に利用していただけるなら」と提供を受け、この松によって観音さまを彫り、被災地に寄贈させていただくのです。

◇

当「仏像を彫る会」の講師は、滋賀県大津市に仏像造顕所「勢山社」を構える渡邊勢山仏師。〝昭和の大仏師〟松久朋琳・宗琳の内弟子として修練を積み、全国の文化財修復に参加。ご自身もまた複数の総本山・大本山より「大仏師」の号を授かっている当代を代表する先生です。この渡邊勢山仏師のもと、来年三月十日に「鑿入れ式」を行い、私たち「仏像を彫る会」の講習生がお体の一部を彫刻させていただき、さらに広く一般の方にも「一人一刀」という形でこの観音さま造顕に携わっていただこうと考えています。その後、渡邊勢山仏師が約八ヶ月の時間をかけて観音さまを完成され、平成二五年一月頃、まず當麻寺中之坊にお祀りさせていて、その後平成二五年三月に陸前高田市に寄贈。最終的に、地元の被災寺院にお納めしていただくという予定になっています。

紅葉のきれいな庭園「香藕園（こうぐうえん）」

◇

福島と岩手という二つの被災地にそれぞれ仏像を届けるという計画に、奇しくも同時に携わることになったのは一体どういうご縁なのだろうか、と深く考えさせられます。仲間の僧侶の中には、何度も被災地に足を運んでいる者もおります。それに対して、私は震災以降、未だ東北には行くことができていません。しかし、たとえ足を運ばなくても何かしら支援に携わることができるということかもしれません。

◇

実際にはどれだけ被災地のお役に立てるのかは分かりませんが、心を込めて鑿を入れさせていただきたいと思っています。そして、被災地にお贈りする前にまず当坊に祀らせていただくことも、被災地から遠く離れた私たちが、震災を忘れないようにするために意義のあることになればと思っています。二～三ヶ月の間ですが、奈良や関西の方が、震災を風化させないこと、そして少しずつでも支援を続けていくことを、これらを思い続けるきっかけになればと思っています。

◇

十一月二一日に笑い仏さまとお別れし、次の逗留地へ送り出させていただきました。つい先日までほとけさまがほほえましい笑顔をふりまいておられた書院の一室が、灯りが消えたようにがらーんとしてしまったのをみると、なんだか寂しい気がしてきます。しかし、笑い仏さまは次の土地でもまた同じように、多くの方に笑顔を届けてくださることでしょう。そして最終的に福島の方々を笑顔にしていただくことを期待してやみません。

◇

私たちもまた、岩手の方に想いを届けられるように、真剣に鑿入れさせていただかなければならないと、気持ちを新たにしているところです。

・・・・・・・・・・・・・・・

當麻寺中之坊を後にして、「笑い仏」さまは今、奈良市の古刹である元興寺に逗留しておられます。道中の詳しい模様は、公式サイト http://www.monk-forum.org にてご覧下さいませ。

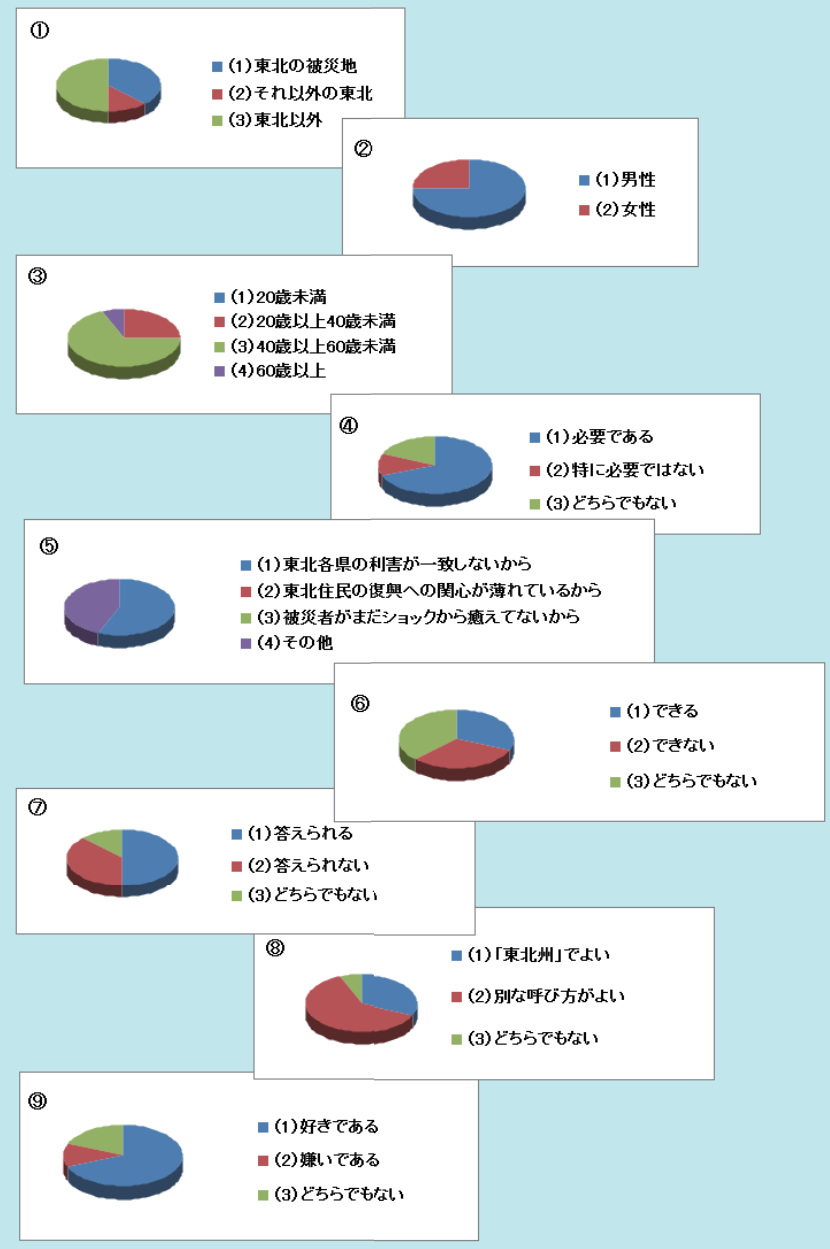
松村實昭師（写真・中）當麻寺中之坊院主

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

第6号　ネットアンケート集計結果

【「東北という枠組み」についてあらためて考えてみる 】

No.	質問と選択肢	回答数
①	現在住んでいる場所	
	(1)東北の被災地	6
	(2)それ以外の東北	2
	(3)東北以外	8
②	性別	
	(1)男性	12
	(2)女性	4
③	年齢	
	(1)20歳未満	0
	(2)20歳以上40歳未満	4
	(3)40歳以上60歳未満	11
	(4)60歳以上	1
④	復興遅れを取り戻すには東北住民の団結が必要か	
	(1)必要である	11
	(2)特に必要ではない	2
	(3)どちらでもない	3
⑤	「東北一丸」となった運動が起きない理由	
	(1)東北各県の利害が一致しないから	9
	(2)東北住民の復興への関心が薄れているから	0
	(3)被災者がまだショックから癒えてないから	0
	(4)その他	7
⑥	今後「東北」は一致団結できるか	
	(1)できる	5
	(2)できない	5
	(3)どちらでもない	6
⑦	「東北って何？」と聞かれて答えられる？	
	(1)答えられる	8
	(2)答えられない	6
	(3)どちらでもない	2
⑧	「東北州」でよいか？	
	(1)「東北州」でよい	5
	(2)別な呼び方がよい	10
	(3)どちらでもない	1
⑨	「東北」という呼び名が好きか？	
	(1)好きである	11
	(2)嫌いである	2
	(3)どちらでもない	3



いつも何気なく使っている「東北」という呼び名についてのご意見をお聞きしました。（回答者十六名）

かつて「蝦夷」とも呼ばれ、その後「道の奥」＝「みちのく」、奥州、奥羽、ときて、明治になって「東北」となりました。東北は国として統一されたことがありません。奥州藤原政権も東北全体を支配下に置いた政権ではなく、伊達政宗も東北支配は出来ませんでした。この「東北」と今後の復興がどんな関係を持っているかという突っ込んだ質問を行いました。

東北復興に東北住民の団結が必要だという意見が69％。「東北一丸」となった運動が起きない理由は東北各県の利害が一致しないからという意見が56％。今後東北は一致団結できるかという質問は、見事に三つに分かれました。できる、できない、どちらでもない。ここに東北復興が進まない内部要因が潜んでいる可能性を感じます。東北って何かと聞かれて答えられるか、答えられるがちょうど50％。微妙な世論です。道州制導入時には「東北州」か、別の呼称かという質問には別な呼称という答えが63％。最後に「東北」という呼び名は好きかとの質問に、好きとの回答は69％。

とても微妙な心理が反映されたアンケートだったと思います。

編集後記

今回号は、編集者兼記者の長引く体調不良で編集・執筆・取材に大分苦労した。加えて、前号までの編集方針のままでよいのかとの疑問も抱きつつ、同時に何か変化の兆しを感じつつ、どのように方向を変えていくかについての明確な方針も打ち出せないまま、モヤモヤとした状態での編集・執筆・取材であった。しかし、締め切り間際で何とか建て直した。体調も編集方針も。

◇

編集方針については、今回号で少し「東北の文化や歴史」に少し切り込んだつもりである。「上辺だけの東北」のパワーで東北復興は実現できない。もっともっと深いところから東北のパワーを掘り起こす必要がある。そして文化にも歴史にも、従来の考え方ではない、新たな観点からの考察を加えるべきだと思う。少し大げさに聞こえるかもしれないが、従来の観点は、戊辰戦争敗戦による敗者の史観、文化観を押し付けられてきたように感じる。それを覆し、新たな次元に突き抜けるには、掛け声だけでなく、多くのテーマを地道に探求する必要がある。

燃え上がろうとしてはいるが、なかなか燃え上がらない東北復興の火。これを燃え上がらせるには、歴史と文化の見直ししかない。

『東北独立』　砂越豊　著
価格：1,260（税込み）

時間が経過すればするほど『東北独立』という選択肢がより現実的になってくる

■新刊■　砂越　豊著　1,260円（税込）
東北独立
東北復興実現に必要なのは、特区でも、道州制でもない。東北が独立して、復興の主権を取り戻す以外にない。そして建国・東北は大きく飛躍し、日本大改造を牽引する。
遊無有出版
〒190-0013 東京都立川市富士見町2-12-13 B1
TEL/FAX 042-512-9833
http://www.yumuyu.com/
河北新報広告掲載
2012.2.12
2012.3.13

あなたの著者制作、お手伝い致します！
電子新聞発行のお手伝いを致します！
お気軽にご相談ください。

『立ち上がれ、オジサン！』
砂越　豊　著

『もうひとつの構造改革』
砂越　豊　著

※電子新聞創刊特別値引
上記 2 冊ともに　1260 円⇒ 500 円（税込）
遊無有出版　検索

遊無有出版 YUMUYU Publishing　立川事業所 042-512-9833　本　社 042-562-3507　立川事業所 yumuyu@wj8.so-net.ne.jp　本　社 contact@yumuyu.com

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.